SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

勢多だより

DEC
20,2011

No. 91

若鮎祭特集・夏の課外活動

第 37 回　若鮎祭を終えて
第 63 回　西日本医科学生総合体育大会

- 新任教員紹介
- 海外自主研修
- ヨット部による追悼慰霊式

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
SETA DAYORI
DEC 20, 2011

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

勢多だより

DEC 20, 2011　No. 91

CONTENTS

メインテーマ：「若鮎祭特集・夏の課外活動」

トピックス

01　第37回「若鮎祭」を終えて　実行委員長　医学科第４学年　織邊　圭太

03　「若鮎祭」実行委員の感想

07　第63回西日本医科学生総合体育大会

「西医体評議委員の仕事を終えて」西医体評議委員 医学科第４学年　松本　有美

「僕たちのSailing Days」　医学科第３学年　井本　博之

10　平成23年度学生表彰

新任教員紹介

12　皮膚科学講座　中西　元　准教授

13　救急集中治療医学講座　松村　一弘　准教授

14　解剖学（生体機能形態学）　宇田川　潤　教　授

15　基礎看護学講座　久留島美紀子准教授

図書館からのお知らせ

16　「附属図書館ホームページ大解剖！」

キャンパスライフ

18　海外自主研修

自主研修を通じて　医学科第４学年　草野　淳

ハルビン医科大学での２週間　医学科第４学年　山口　佳奈

22　滋賀医科大学奨学金奨学生の決定

24　ヨット部による追悼慰霊式

2011年　嶋岡さん追悼慰霊式　ヨット部主将　医学科第３学年　成田　雄亮

国立病院機構 滋賀病院だより

25　地域医療の充実に向けて　総合外科学講座　教授　来見　良誠

インフォメーション

28　平成23年度第１回学位授与式

29　平成23年度医学科第２年次後期学士編入学入学宣誓式並びに
平成23年度秋季大学院医学系研究科博士課程・修士課程入学宣誓式

32　第37回滋賀医科大学解剖体慰霊式 10/27

編集後記（宮松編集長）

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
SETA DAYORI

トピックス

第 37 回「若鮎祭を終えて」

第３７回若鮎祭実行委員会委員長　医学科第４学年　織　邊　圭　太

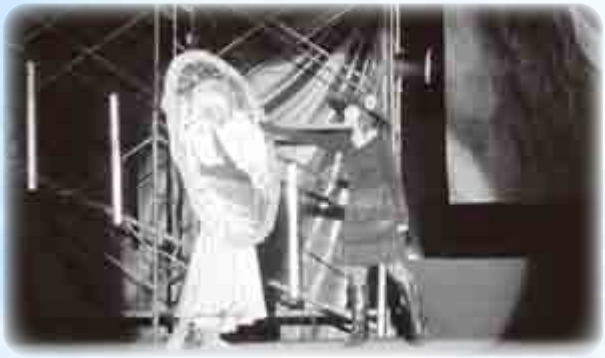
現在、若鮎祭が終了して約１週間経ちました。長い準備期間を経てからの前夜祭、１日目、２日目の怒涛の本番３日間、そしてその後の片付け日も終わり今年の若鮎祭は大きな事故等もなく無事終了しました。この３日間は若鮎祭に携わった全ての方々の努力の集大成であったため、このような素晴らしい学園祭になったことを全ての人に感謝します。ここからは若鮎祭までの思い出を少しずつ書かせていただきたいと思います。

○２月～４月

私は去年の実行委員長であった石河さんからの次期実行委員長への就任依頼を受け、自分の心の中にあった「学生の内に何か大きな仕事を成し遂げたい」という気持ちから次の実行委員長を引き受けることを決意しました。しかしこれまで私が見てきた過去３年間の若鮎祭では、毎年人望に溢れているであろう素晴らしい先輩方ばかりが委員長というポストに就いているのを目の当たりにしてきていたため、自分なんかに本当にこのポストが務まるのかという不安いっぱいのスタートでした。この後は若鮎祭を共に運営する立場である実行委員会のメンバー決めに頭を悩ませました。どのようなメンバーをどの局の局長に据えるのがいいのか、去年の委員長や周りの友達と相談し、そのあとで本人に交渉するという作業の繰り返しでした。各局を率いるという大変な仕事を引き受けて下さった各局長の皆さん本当に長い間ありがとうございました。看護学科２回生の副局長も見ず知らずの私の下で働いてくださりありがとうございました。このようにして実行委員会のメンバーも決まり次に若鮎祭のテーマを話し合いました。ちょうどこの頃に東日本大震災が起こり、この震災は１万人を超える死者を出す未曾有のものとなり、日本中が一つになることが求められていました。そのこともありテーマは「絆」に満場一致で決定しました。このテーマはありふれているという批判も中にはあるでしょうが、半年以上若鮎祭の運営に携わった私としては、この若鮎祭はたくさんの人々の努力があって初めて成し得たと思えるので適切なテーマだったと思います。

○夏休み

４月が過ぎ新学期になると新歓なども始まりあっという間に夏休みとなりました。この頃には大まかにメインとなるステージ企画やその他の企画が決定し、若鮎祭が近づいてきていることを実感しはじめました。私としては（とても自分勝手な意見と捉えられてしまうかもしれませんが）、もし今年私が夏休みにあまり自分の時間を持たないと、次の代の実行委員長が夏休みも若鮎祭のために費やさなければならないと負担に感じてしまうかもしれない、だからこそ夏休み



はやるべき仕事をしつつも自分の時間も持とうと早い時期から一人で心に決めていました。その結果、部活での西医体、キャンプの他にも、スペイン旅行や韓国旅行、高校野球観戦に富士急、飲み会等これまでで一番というくらいに遊びまくりました。このように委員長でも遊べるというのは是非皆さんに知っておいてほしいです。ただ連絡ミスがあり一部の人にはご迷惑をおかけして申し訳ありません。そして、私がいない間に代わりに仕事をしてくれていた副委員長の皆さん本当にありがとうございます。このように夏休みは楽しいことばかりであっという間に過ぎ去っていきました。

○直前

この頃になるとステージ局のメンバーを中心として、ステージ企画の細かい調整や壁紙作り、動画編集等で夜遅くまで学校に残るメンバーが増え、若鮎祭まであと○○日しかないとみんなで焦る日々となっていました。また自分が進捗状況を把握できていないと不安になり、ついつい細かいことにまで口を出してしまい色んな人に迷惑をかけてしまったと思います。

○前夜祭、１日目、２日目

本番がスタートすると、私は自分が責任者である企画以外に関しては極力楽しもうというスタンスでいたので、様々な企画で参加している友達を応援したり、動物園でアルパカとの記念写真を楽しんだりと若鮎祭を今まで以上に満喫しました。細かなトラブルは多々ありましたが、どれも大事には至らなかったのが不幸中の幸いだと言えます。

○最後に

最後となりましたが、馬場学長、服部副学長、柏木病院長をはじめとする大学、病院の教職員の皆さま、今年の若鮎祭の顧問である西先生（医学科）加藤先生（看護学科）、永田学生生活支援部門長をはじめとする学生生活支援部門の先生方、湖医会をはじめとするＯＢ、ＯＧの皆さま、学生支援係の栗本さんをはじめとする学生課の皆さま、後援会の父母の方々、協賛してくださった企業の皆さま、若鮎祭に参加してくださった方々、そしてなにより医学科４回生、看護科２回生の実行委員会の皆さん本当にありがとうございました。これらの方々あっての第３７回若鮎祭の成功であり、感謝しても感謝しきれないほどです。

これから若鮎祭に携わっていく医学科１～３回生、看護科１回生の皆さんへ。みんなのために長い準備期間を過ごすのは大変なことですが、その苦労の分、若鮎祭を無事成し遂げたあとの達成感は言葉に表せないほどです。だからこそ皆さんが若鮎祭を運営する側になった時は率先して実行委員会、そしてさらに言えば実行委員長になってください。よろしくお願いします。

第３７回若鮎祭は皆さんのご理解、ご協力のおかげで無事成功を収めることができました。これからも続く若鮎祭がますます発展していきますよう願いを込めて私の文章を終えたいと思います。本当にありがとうございました。

「若鮎祭」実行委員の感想

会計　医学科第４学年　矢野　光一

まずは第37回若鮎祭が無事開催されましたことを学生一同感謝申し上げます。

振り返ってみますと、今年の２月に執行部の活動がスタートしてから、あっという間に学園祭が終わってしまったという感覚です。

当初、会計の仕事というとお金を管理するだけだと思っていました。しかし、実際にはお金の使い方を巡り、企画の内容まで担当者と話し合うなど、深く学園祭と関わることができました。

学祭前は無事に終わって欲しいという気持ちが強かったのですが、終わってみると、もう一度学園祭をやってみたいという寂しさでいっぱいになりました。

来年学園祭を担当する方々には今年を超えるものを作っていただき、より本学を盛り上げていただきたいと思います。

最後になりますが、学園祭を応援していただいた企業の皆様、大学内外の先生方に感謝を重ねて申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

副委員長　医学科第４学年　市場　雄大

今年も第37回若鮎祭が無事開催され、皆様のご協力に心から感謝申し上げます。

さて、私事でございますが、私自身は今回の学園祭での役割は保険の整備など、裏方に回ることが多かったですが、目立った事故も無く縁の下の力持ちという役回りを無難に果たすことが出来ほっとしているところです。当日、ステージの上の催し物が盛り上がっているのを見ると、えも言えぬ充実感に満たされたことを昨日のことのように思い出します。来年の学園祭も今年以上に盛り上がることを期待し、次学年へのエールにしたいと思います。最後になりましたが、重ねて関係者皆様への感謝を申し上げたいと思います。

副委員長　医学科第４学年　岡本　寛樹

今は無事学祭を終えることができてほっとしています。２月くらいに実行委員が立ち上がってからさまざまな準備を行ってきました。その準備が功を奏してすばらしい学祭を行えたことに大きな満足感を得ています。僕自身はステージ局員としても働いてきて、学祭直前・当日も忙しくつらいと思ったこともありましたが、いっしょに働くステージ局（特に映像班）・総務局の人達の姿を見て、自分も負けじと思いがんばることができました。

共に仕事をしたみんなに感謝です。学年全体が力をあわせて何かをするみたいなことは滅多にないと思うので、何事にも代えがたい経験ができたと思います。来年も今年以上の学祭が行われることを信じて。本当にありがとうございました。

副委員長　医学科第４学年　安井　悠

僕は今回の第37回若鮎祭を副委員長という立場で臨むにあたって、色々と不安でした。始めは、副委員がどんな仕事をすべきなのかも分からなかったし、若鮎祭がどのように開催されていくのかも想像できませんでした。しかし、若鮎祭の準備をしていくうちに同じ執行部のみんなや他の局員のみんなの助けを借りることができ、本当に良い学祭になったのではないかなと思いました。

始めは本当に手探りの状態から始まった学祭執行部でしたが、終わってみれば学生のみんなや、寄付をしてくださった方々、手伝いをしてくださった学生課の方々などいろんな方々との『絆』を実感することができました。来年の学祭もこの『絆』を大事にして良い学祭になっていけばいいなと思います。

副委員長　看護学科第２学年　栗田　知美

若鮎祭お疲れ様でした。たくさんの人の協力があったからこそ、若鮎祭は成功できました。ありがとうございます。私は準備から当日を含め、さまざまな場面で楽しませていただきました。

その一瞬を盛り上げるために、長い時間をかけ、細かい部分まで工夫しようとみんなが頑張っている様子を見て、私は幸せな気持ちになりました。

学園祭では、いろいろな役割があります。その役割はどれもすごく大事で、大変な仕事も多いですが、最後にはきっと達成感を得られると思います。

私も、本当に楽しかったです！！

来年の若鮎祭も楽しみにしています。アットホームな滋賀医大の学園祭が、これからもずっとずっと続きますように･･･願っています。

副委員長　看護学科第２学年　吉川　芙雪

今回、私は副委員長をさせていただきました。去年は部活の模擬店の店番しかしていなくて、何をしたらいいのかわからないことが多かったのですが、４回生の先輩方に聞きながら無事終わることができました。今年のテーマである「絆」に沿った企画やフィナーレが行われ、絆を深めることができる、楽しい若鮎祭となったと思います。

あまり大した仕事はできませんでしたが、執行部として若鮎祭に携われて貴重な経験ができました。

最後になりましたが、ご協力いただきました先生方、スタッフの皆さん、ありがとうございました。

ステージ局局長　医学科第４学年　山田　聖

今年の学祭は去年とは違うものにしてやろうという気持ちが強く、ステージの形から、企画の内容まで出来る限りオリジナルにしました。そのため企画数も増え、各企画の担当者には苦労をかけたと思います。無理難題を解決してくださったスタジオ･フィディアさん、徹夜で映像を作成してくれた映像班、フィナーレに命をかけてくれたフィナーレ班、面倒な仕事を一手に引き受けてくれた交渉班、まだ精算の仕事が残っている会計、そして、私の代わりに色々と雑務をしてくれた副局長、本当にありがとうございました。最高の思い出をみんなで作ることができて本当に良かったと思っています。ぜひ、次の学年の方々もいい思い出を作ってください！

ステージ局副局長　看護学科第２学年　清水　真季

第37回の若鮎祭が無事に終了し、心の底から安堵しています。というのも私が本格的に仕事をし始めたのが若鮎祭開催の約１週間前からだったからです。私の仕事は事務的な物が多く他の班が企画を進めていた時に楽をしていたバチが当たったように思えました。それでも前夜祭の午前中に何とか仕事を終わらせて、疲弊した状態で本番に臨みました。

今年のステージ企画は数が多く、その分局員一人一人のやりたい事を実現出来たのではないでしょうか。ステージに必要なのは勿論観客を楽しませる事ですが、それ以上に自分達の本当にやりたい事は何かを追求し、それを実行することだと思いました。

ステージ局の皆さん、本当にお疲れさまでした！

企画局局長　医学科第４学年　岩本　久幸

まずは、企画局の関連の企画に関わってくださった皆さん、そして若鮎祭の運営に際して、ご寄附やご援助をいただいたすべての方々に深く感謝いたします。

局長は、局員のみんなが頑張ってくれなければ、まったく何もできないです。しかし、逆に、局長が正しい情報を整理し、判断し、局員に伝えなければ、局員も働けないのです。だからこそ、責任感を持って他局や大学、実行委員と連携を取りながら、迅速に働かなければならないので、無理をすることも…しかし、そういう時ほど頼れる、一緒に頑張ってくれる仲間がたくさんいるのです。何もかも一人でしょい込もうとせずに、誠心誠意頑張っていればみんなが助けてくれるので、どうか来年度もがんばってください。

企画局副局長 看護学科第２学年　増山　悠希

今回の若鮎祭は本当にみなさんに感謝しなければならないと感じています。

様々な企画を運営していくには沢山の人の協力が必ず必要になります。

僕自身何も力になれず局長や企画局の人達に迷惑ばかりかけてしまい、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。特に局長の岩本さんには感謝の言葉しか出てきません。本当にありがとうございました。僕自身も昨年とはまた違った若鮎祭となり、責任をもって行動しなければならないということを改めて感じさせられるとてもよい経験になったと感じています。

これからもこの経験を忘れずに頑張っていきたいと思います。

今回の企画を運営してくださった方々、参加してくださった方々、本当にありがとうございました。

広報局局長　医学科第４学年　池川　貴子

11月に入り、若鮎祭を無事終えることができた安堵感とともに、空虚感も少し感じています。

今年の若鮎祭は、テーマでもある『絆』を感じる学園祭でした。私自身、仕事ができるほうでなく、何度も戸惑い、ミスもしました。しかし、そのたびに、局員はもちろん、局や学年、男女に関係なく、多くの方が優しく助けてくれました。

その優しさに支えられ、みんなで作り上げることの喜びを得ることができました。

学祭で関わったすべての方々に感謝しています。本当にありがとうございました。

広報局副局長　看護学科第２学年　吉田　優美

春から広報局の仕事をしていきましたが、予定通りに仕事を進めることができず、大変なことばかりでした。局員の力なしでは、今年度の若鮎祭を無事に終わらせることはできなかったと思います。局員のみんなには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました！

広告局局長　医学科第４学年　大嶋慎一郎

広告局の仕事は、学園祭に協賛して下さる広告主様を探し、運営のための資金を得ることです。この仕事は学園祭を運営していく上で不可欠であり、学園祭が成功するかどうかは広告局員の肩にかかっているといっても過言ではないと思います。しかも、学外の一般社会の方々と関わり、お金を取り扱う仕事なので自然と責任感と緊張感が生じます。

このような環境の中で得られるものは実に多く、社会に通用するコミュニケーション能力など、普段の学生生活では忘れられがちな大切なものを改めて学ばされました。

皆様も、この学園祭を通して自分にとって財産となるさまざまな素晴らしい経験や出会いをされたことと思います。

広告局副局長　看護学科第２学年　大橋　芽衣

若鮎祭お疲れさまでした。今回私は広告局の副局長を務めさせていただきました。若鮎祭が始まる大分前から広告局の仕事が始まりましたが、本当に大変でした。暑い中スーツで街中を右往左往しながら歩き回ったことが懐かしいです。そしてその頑張りが実るように素晴らしい文化祭になったと思います。目立たない仕事ですが、なくてはならない裏方の仕事で、私にとってとても良い経験ができました。

最後に協力してくださった皆さんに本当に感謝します。この文化祭に携わることができて、とても充実した日々を送ることができました。ありがとうございました！

総務局局長　医学科第４学年　大島　理利

総務局の局長として臨んだ今年度の若鮎祭は、私にとって人とのつながりとその大切さを考えさせられる、かけがえのない時間となりました。

総務局の仕事は地味ではありましたが、来場者はもちろんのこと、模擬店を出店している本学の学生や関係者にも快適な学園祭を過ごしてもらう為の重要な仕事だったと思っています。そして、その重要な仕事は総務局内の各班班長を中心とした全局員や他の実行委員、模擬店の店長、そして教職員・事務員の方々のご協力と支援があって初めて達成しうるものでした。

若鮎祭が終わるまで、身体的にも精神的にも苦しい時期がありましたが、皆さんとの「絆」のおかげで乗り越えてこられました。本当にありがとうございました。

総務局副局長　看護学科第２学年　井上　和泉

若鮎祭お疲れ様でした。多くの人が協力し合うことで、若鮎祭を無事に終了させることが出来て本当によかったです。

「総務は忙しい」と言われていますが、振り返ってみると確かに10月に入ってからは忙しかったです。それと同時に、終わった今では総務局はとてもやりがいのある局だと思います。学園祭を裏から支える総務局はなくてはならないものだと感じました。

最後になりますが、総務局の局長、班長、局員の皆様にとても助けられました。

私自身ができたことはわずかでしたが、無事に終われたのも、副局長を務められたのも皆さんのおかげです。本当にありがとうございました！

第 63 回 西日本医科学生総合体育大会

今年度の西日本医科学生総合体育大会（通称：西医体）は大阪医科大学が主幹校として 8 月上旬に開催されました。

今年度は個人種目等に好成績が多くあったものの、団体種目での優勝が比較的少なかったのが影響したのか総合成績は 28 位（全 44 校中）となりました。

来年の本学学生のさらなる活躍を期待したいと思います。

第 63 回 西日本医科学生総合体育大会等の主な成績（ベスト 8 以上）

クラブ名	成　　績
ヨット部	470級　優勝
バドミントン部	女子　個人ダブルス（3位：奥田・舟山ペア） 男子　個人ダブルス（3位：平野・上田ペア）
ボート部	一般男子舵手付きフォア　6位 男子ダブルスカル　4位 男子シングルスカル　5位・6位 新人男子舵手付きフォア　8位 女子舵手付きフォア　2位・7位
合気道部	医療体 個人・有段の部　敢闘賞 渡邉　奈利子（看3）・廣坂　雄介（医3）組
ソフトボール部	準優勝
水泳部	女子200m個人メドレー　1位　高田　真央 女子100m背泳ぎ　2位　高田　真央 男子200m個人メドレー　5位　山本　大雅 男子400mメドレー　5位　山本　大雅
柔道部	女子個人 上村　真由佳　3位、　全　梨花　4位
男子バレー部	ベスト8
準硬式野球部	ベスト8
剣道部	「西日本コメディカル大会」女子団体　ベスト8
ハンドボール部	優　勝 M V P　：満田　雅人 得 点 王　：満田　雅人 ベスト7　：生田　旭宏、黒住　日出夫 ベストキーパー：上林　翔大
陸上競技部	男子800m　7位　岡本　寛樹（2' 05" 62） 男子300m障害　6位　脇坂　穂高（10' 16" 65） 男子4×400mR 2位　大槻　晋士・松浦　智史・岡本　寛樹・木村　浩一朗（3' 28" 36） 男子やり投げ　8位　大石　健（44m59） 男子砲丸投げ　1位　林谷　俊和（11m32） 男子円盤投げ　3位　林谷　俊和（30m07） 男子ハンマー投げ　8位　林谷　俊和（25m59） 女子3000m　8位　堺　淑恵（12' 11" 62） 女子やり投げ　4位　堺　淑恵 女子円盤投げ　7位　南　志乃（14m03）

西医体評議委員の仕事を終えて

医学科第４学年　松　本　有　美

昨年10月から始まった、一年間にわたる西医体評議委員の仕事が終わりました。

一年間にわたる仕事、といっても、評議会自体は年4回と少なく、さほど負担ではなかったです。

評議会が終わったら西医体運営委員の方が指定する期限内に資料を各キャプテンに配り、期限を守ってもらうという、作業としてもいたって簡単なものでした。(各キャプテンに期限を守ってもらうよう徹底することはなかなか難しかったですが。)

評議会を通じて学んだことは、『西日本医科学生総合体育大会』という、大変大きな規模の大会を運営するのは、すごく大変だということ。

今年度の主管校は大阪医科大学で、評議会が始まる前からの知り合いも多く、身近に大変さを感じました。

３回生の後半から本格的にはじまる西医体運営のために、１回生の頃から徐々に準備を行っていたり、会計では途方もないような金額のお金を管理したり…部活や勉強など、私生活を営む傍ら、常に大会運営のことに意識を置く生活は、かなり負担が大きかったことと思います。

そんな他大学の同回生達が陰ながら頑張っている姿を見ることができたのは、西医体評議委員になったからだと思います。何事も、大きな集団をまとめ、会を運営していくには、見えない所でたくさんの人達の努力やサポートがあることを、改めて意識することとなりました。

また、評議委員になった特典とも言えることだと思うのですが、今回の西医体評議会を通じて、他大学の医学生との交流を深めることができたことがあげられます。

医学生として普通に生活しているだけでは、すごく狭くて広がりのない学生生活を送ることになります。他大学と情報交換できる機会があることで、すごく刺激になりましたし、他大学の学生の生活を垣間見るのはとても新鮮でした。

このように、各大学一人が担う評議委員をやらせていただいて、すごく実りのある仕事をできたと思います。

僕たちの Sailing Days

滋賀医科大学体育会ヨット部前主将 医学科第３学年　井　本　博　之

ヨットがどのようなスポーツかご存じだろうか。風で遊ぶ優雅なスポーツとイメージなさる方も多いだろう。確かにそういう一面もある。一切の動力を用いずに風の力のみで自在に移動できる。昨今の動力依存を考えると誠に優雅なふるまいである。一方で風が無ければなす術がなく風が強すぎてもお手上げになる。セーラー達は自然のもたらす許された中間領域でのみしか己の技を磨くことが出来ない。

風が適度に吹いているときのセーリングはなんとも心地いい。風は強さも向きも刻一刻と変化する。セーラー達がそのわずかな変化を一瞬で察知していることをご存知だろうか。頬に当たる風量、風の音、船の傾きやパワー、などあらゆる知覚を総動員して最速を目指す。適切なトリムが適切な加速と音を生み出す。従って適切な感情をもたらす。大変健全である。何より面白いのは、習熟につれてこれら知覚が身体という場で再構築されていくその様である。同じ時間内により多くを知覚する。従って名人は時間を先行する。誠に面白い。

時に風は私達の技術を無視して吹き上がる。強風下でヨットがいかにハードなスポーツになるか皆さんは想像もつかないであろう。ジェットコースターよりもスリルにあふれ、ゴムボートも追い付けないほどに速くなる。一挙に吹き荒れると、沈艇が続出し墓場と化したかのごとく辺りが騒然とすることもある。張りつめた感覚が一瞬でもすり抜けると転覆する。チームが団結しなければたちまち事故につながる。ヨット部員達の絆が強固であるのは、命が危ぶまれる状況がいつもそばにあるからである。

会場風景

大会選手宣誓

服部副学長の
開会挨拶

そのような私たちにレスキュー体制の充実が欠かせない。練習艇には必ずレスキュー艇が見守るようにしている。昨年レスキュー艇として２０年も機動していた白鷺３世がついに倒れ、白鷺４世を迎え入れた。ご尽力頂いた関係者、特に学生課の栗本さんに謝意を表する。

凍てつくような冬の朝早く、一斉に飛び立つ１００羽もの鳥たち。穏やかな天候から一転、強烈な雨風とともに神々しく光を放つ水面。日没とともに世界が紅く染まっていく。大自然の中、私たちが安全に活動できるのは周囲の経済的な精神的な支えに依る。この度の西医体で４７０級優勝を実現できたのも全く周囲のご協力の賜物である。ご支援賜った皆様に改めて感謝する。

滋賀医大のテント

平成23年度　学生表彰

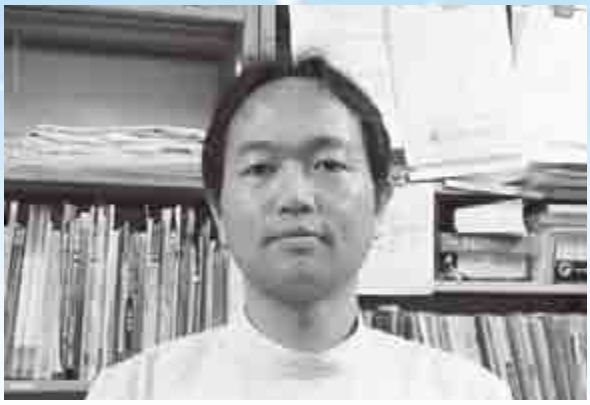
10月29日（土）、第37回若鮎祭開会式後に中庭水上特設ステージで、滋賀医科大学学生表彰の表彰式を挙行しました。

今回、表彰を受けられたのは、平成22年9月から平成23年8月までの間に優れた実績、評価を得た10の個人及び団体です。また、博士課程の大学院学生によるポスター発表会の評価結果に基づく「優秀ポスター賞」の授与がこれに先立ち行われました。受賞者には馬場学長から表彰状と副賞の目録が授与されました。

受賞者	受賞理由
男子バレーボール部	第７回日本医歯薬大会優勝
水泳部 **高田　真央**	第６３回西日本医科学生総合体育大会 女子２００M個人メドレー優勝
ハンドボール部	第６３回西日本医科学生総合体育大会優勝
ハンドボール部 **満田　雅人**	第６３回西日本医科学生総合体育大会 ハンドボールにおいてＭＶＰに選出
ハンドボール部 **上林　翔大**	第６３回西日本医科学生総合体育大会 ハンドボールにおいてベストキーパー賞に選出
陸上競技部 **林谷　俊和**	第６３回西日本医科学生総合体育大会 砲丸投　優勝
アカペラサークル （食後３錠）	全国５６３グループが参加した予選を勝ち抜き、フジテレビの全国ネットの音楽番組「ハモネプ」に本戦決勝１５組のひとつとして出演し、最終４組にも選出された。
ヨット部	第６３回西日本医科学生総合体育大会 ４７０級　優勝
医学科第５学年 **野田　晶子**	第１回アジア太平洋合同ＰＢＬ会議2010の「Ｓｔｕｄｅｎｔｓ' Ｐｅｒｓｐｅｃｔｉｖｅ（学生の視点）」領域で、口頭発表した演題：Removing Barriers to More Effective PBL：が優秀な発表として表彰された。
国際保健・地域医療研究会 TukTuk	東日本大震災直後から、多くの部員がボランティア活動を行い、所属学生以外の本学学生ボランティアの調整役も行い、また、災害に関する学習会を開催し、この活動はマスコミ等にもとり上げられた。

新任教員紹介

皮膚科学講座



准教授　中　西　　元

平成23年４月１日付けで皮膚科学講座の准教授を拝命致しました。簡単に自己紹介させていただきますと、滋賀県守山市出身ですが、岡山大学医学部に入学した後、岡山大学皮膚科学教室に入局し岡山大学病院とその関連病院に勤務しました。その後、平成20年１月より滋賀医科大学皮膚科の講師として勤務させていただきました。

岡山大学病院では、臨床面では、厚生労働省皮膚稀少難治性皮膚疾患調査班班長である岡山大学皮膚科教授の岩月啓氏先生指導のもと汎発性膿疱性乾癬の診断基準作成に参加させていただくとともに、尋常性乾癬などの角化症を中心とする診療をさせていただきました。研究面では、現在川崎医科大学皮膚科学教授である藤本亘先生にご指導を受けて、サイトカインに対する皮膚角化細胞の反応などについて研究させていただき、さらに、米国国立環境衛生科学研究所Jetten博士のもとに留学し、尋常性乾癬における転写因子の関与について研究しました。

滋賀医科大学に勤務させていただいたこの3年あまりの間、角化症を中心とする日常診療をさせて頂くとともに、新たにふたつのことをはじめました。ひとつは、当科でも先進医療を行わなくてはならないと考え、皮膚線維肉腫における腫瘍特異的融合遺伝子の検査を先進医療としてはじめました。皮膚線維肉腫はしばしば良性の皮膚線維腫との鑑別が難しい間葉系の悪性腫瘍ですが、遺伝子診断を用いることでより正確に診断できます。この検査は、東京大学皮膚科、熊本大学皮膚科に続いて全国で3番目に先進医療として認定されました。現在、それ以外にもケラチン病の遺伝子診断などについて先進医療申請の準備をしているところです。もうひとつは、ヒトパピローマウイルス（HPV）の皮膚感染症についての臨床研究をはじめています。HPVは子宮頸癌以外にも皮膚に癌を生じるウイルスとして知られていますが、外注で行える検査より細かな解析を加えることにより悪性化の程度を判定できる検査方法について検討しています。現在までに全国６カ所あまりの大学から貴重な臨床検体を送っていただき、それぞれ学会、論文発表にてその成果を報告しています。

最後になりましたが、准教授就任にあたって、田中俊宏教授をはじめとする他のスタッフの皆さんに日頃よりサポートしていただき、本当に感謝しております。滋賀医大でしかできない診療や研究が確立できるように研鑽していく所存です。今後ともぜひよろしくお願い申し上げます。

経歴

1993年３月　岡山大学医学部卒業
1997年３月　岡山大学大学院医学部医学科卒業
1997年４月　広島市民病院皮膚科勤務
1999年４月　岡山大学医学部皮膚科　助手
2000年９月　米国国立環境衛生科学研究所　研究員
2003年９月　岡山大学医学部皮膚科　助手
2008年１月　滋賀医科大学皮膚科　講師
2011年４月　滋賀医科大学皮膚科学講座　准教授

救急集中治療医学講座

准教授　松　村　一　弘

平成23年４月１日付けで救急・集中治療学講座の准教授に就任いたしました。

大阪出身で、滋賀医科大学医学部11期生です。在学中は準公式野球部に所属し、すばらしい先輩・後輩ならびに同期にめぐまれ、関西地区優勝（全学）と西医体３連覇を経験させていただきました。医師になってからも、野球部はもとより滋賀医科大学の諸先輩・後輩の手助けをいただき、何とか医業をこなさせていただいており、母校の温かみを感じております。

私が本学を卒業した頃は、ストレート研修であり、ジェネラルに患者さんを診療したいと考え、当時の第３内科繁田幸男教授のもとで研修を始め、のちに、吉川隆一教授ならびに柏木厚典現病院長に御指導していただきました。研究では第３内科の諸先生をはじめ、小島秀人、現分子遺伝医学准教授に御指導していただき、本学にて学位（医学博士）を賜りました。またアメリカのテキサス州ヒューストンにあるベーラー医科大学のローレンス・チャン先生の御指導にて３年９カ月の留学生活も経験させていただきました。

留学を終え、本学の内分泌・代謝内科（現糖尿病・内分泌内科）に戻り、よりジェネラルに患者さんを診療できるようになりたいと考えていた折に、柏木厚典現病院長ならびに前川聡、糖尿病・内分泌内科教授の御推挙もあり、救急・集中治療学講座江口豊教授のもと、１次から３次までの救急医療および集中治療の御指導をしていただけることとなり、現在も御指導していただいております。

より良い救急集中医療・集中治療を行う上で、各科との協力が必要不可欠ですが、いつも各科の諸先生方より御指導していただき、日々勉強させていただき感謝しております。これも滋賀医科大学の先輩・後輩という良い意味での関係がプラスに働いているのではないかと思っております。

そこで、本学の卒業生がもっと多く、母校で研修してくれれば、先輩・後輩・同期のつながりで、もっともっと、自己の手助けにもなり、切磋琢磨できると私は思っています。大学以外の病院内でも先輩・後輩・同期のつながりが増え、ひいては滋賀県全体の医療レベルも高くなるのではないでしょうか？また医療だけでなく研究面でも同じことがいえると思います。そして滋賀医科大学をより一層盛り上げていって欲しいと考えております。

より多くの卒業生が、本学で研修してくれるよう、また少しでも救急・集中治療に貢献できるように、未熟で微力ですが精進してまいりたいと考えておりますので、皆様方の御指導御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

経歴

1991年　滋賀医科大学医学部医学科卒業
1991年　滋賀医科大学第三内科　医員　（研修医）
1992年　清恵会　近江温泉病院　内科　（研修医）
1993年　滋賀医科大学第三内科　医員　（研修医）
1993年　滋賀医科大学大学院入学
1997年　滋賀医科大学大学院卒業　（医学博士）
1997年　滋賀医科大学　救急部　医員
1997年　大阪府保健医療財団　新千里病院　内科　医員
1999年　誠光会　草津総合病院　内科　医長
2000年　Baylor College of Medicine (U.S.A.) Cell Biology research fellow
2004年　滋賀医科大学 内科（内分泌代謝科）　医員
2005年　同　救急集中治療部 助教
2006年　同　救急部病棟医長
2007年　同　救急集中治療部 副部長
2008年　同　救急集中治療医学講座 助教
2008年　同　救急集中治療医学講座 講師
2011年　同　救急集中治療医学講座 准教授

解剖学（生体機能形態学）

教　授　宇田川　　潤

平成23年６月１日付で、解剖学講座生体機能形態学部門の教授に就任いたしました。私は愛媛県出身で、大学以降はほぼ島根におりましたが、母が京都府出身ですので、夏休みなど母の里帰りの際には滋賀にも遊びに来ておりました。琵琶湖のほとりのレジャー施設（紅葉パラダイス？）にある流水プールや、びわ湖に落ちたらどうしようという恐怖感を味わいながら乗ったジェットコースター、比叡山ドライブウェイを通って山頂までたどり着いたときの光景などを懐かしく思い出します。

私は島根医科大学を卒業後、大学院で解剖学講座にお世話になりながら、１年間個人病院で内科研修を積みました。臨床にも非常に興味がありましたので、臨床医の道を歩もうか、それとも基礎医学の道に進もうかと、研修が終わる直前になってもまだ悩んでおりました。しかし、当時の教授から、“解剖はどんな研究をしても良い分野です。君のしたい研究ができますよ。”との甘い言葉に誘われ、基礎医学の道に進むことを決意しました。大学院時代には九州大学で有機合成の勉強をさせていただき、2006年にはChalmers大学の数学科で形の数理解析について勉強する機会をいただきました。勿論、研究の中心は中枢神経系の発生ですが、これらの体験を生かしながら新しい研究のアイデアを考え、発展させていく時の胸の高鳴りは、何度経験しても良いものです。研究の発想は常に自由で柔軟であるべきです。学生の皆さんや若い先生方の発想を大切に、皆様の夢を実現することが、私の役目の一つと考えております。アイデアを形にし、力を試したいと思っていらっしゃる方々、サポートしますので気軽に研究室をお訪ね下さい。

最後になりましたが、本学の解剖学教育における伝統的な倫理教育は、他に類のない素晴らしいものです。この伝統を大切に継承し、患者さんから信頼される人間味豊かな医師を育てるために尽力していきたいと考えております。皆様には今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

経歴

1992年　３月　島根医科大学医学部　卒業
1992年　４月　島根医科大学大学院医学系研究科博士課程　入学
1996年　３月　同　単位取得退学
1996年　４月　島根医科大学医学部解剖学講座第一・助手
2003年　４月　島根医科大学医学部解剖学講座発生生物学・助手
2003年10月　島根大学医学部解剖学講座発生生物学・助手
2005年　７月　島根大学プロジェクト研究推進機構・助手
(2006年６月～11月　スウェーデン Chalmers 大学留学)
2007年　５月　島根大学医学部解剖学講座発生生物学・助教
2008年　１月　島根大学医学部解剖学講座発生生物学・准教授
2011年　６月　滋賀医科大学医学部解剖学講座生体機能形態学部門・教授

基礎看護学講座

准教授　久留島 美紀子

平成23年８月１日付で、基礎看護学講座の准教授に就任致しました。

私は看護師として呼吸器、内分泌、消化器の慢性期病棟で５年間勤務しました。臨床では患者教育やターミナルケアなどに関心を持っていましたが、看護の面白さと奥深さを教えてくれた恩師の影響で、平成８年から看護教員として歩み始めました。当初は成人看護担当の予定だったのですが、着任すると基礎看護担当になっていました。学生時代から看護技術が苦手だった私は、演習室にこもって毎日モデル人形相手に清拭の練習に明け暮れました。結局、その経験が看護技術教育に興味を持つきっかけとなりました。

また、平成13年３月に滋賀医科大学医学系研究科の修士課程を修了しました。修士課程では、新人看護師の職場適応を促す先輩看護師の関わりについて研究しました。私が初めて本格的に取り組んだ研究です。在学中の２年間には、研究手法のみならず、研究者としての在り方を厳しくご指導頂きました。途中で何度も挫けそうになりましたが、サポートして下さる先生方や志を同じにする良き仲間に支えられ修了することができました。その後滋賀県立大学で、京都市看護短期大学学長の豊田久美子先生のもと看護技術教育に携わった経験が教育観の基盤となりました。

現在、医療の高度化、患者・家族の意識の変化、看護職の役割の拡大、チーム医療・役割分担の推進などの影響により、看護教育は転換期を迎えています。また、基礎教育を終えたばかりの新人看護師の早期離職が問題となっています。これらに共通して求められているのは「看護実践能力」の育成です。それは単に、援助技術ができるということはありません。対象に寄り添う力、判断力、コミュニケーション能力等を含んでいます。

私は、1・2年生を対象に看護技術に関連する科目を担当していますので、入学当初から、看護実践能力を涵養する看護技術教育の方法を検討したいと思っています。さらに、一見、誰が行っても良いように見える行為を、Evidenceや原理・原則に基づいて、かつ、対象の生活と個別性を考慮して行うことが看護の専門性であることを学生に伝えたいと考えています。それが、かつて私自身が諸先生方から受けたような知的好奇心を高めるような刺激になればと思っています。

また、授業にあたり、家庭医療学講座の田村祐樹先生、附属病院薬剤部の寺田智祐先生、看護臨床教育センターの先生方、専門・認定看護師の方々に、様々なご示唆やご支援を頂く機会を得ておりますことに感謝しております。

教員としても、研究者としてもまだまだ未熟者ですが、皆様のご指導とご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

経歴

1989年　３月　国立療養所付属准看護学校卒業
1991年　３月　社会保険中京看護専門学校卒業
1991年　４月　社会保険中京病院　看護師
1994年　４月　社会保険相模野病院　看護師
1996年　３月　玉川大学文学部教育学科（通信教育課程）卒業
1997年　３月　東京都立医療技術短期大学看護教員養成講座　修了
1997年　４月　滋賀県立大学看護短期大学部　助手
2001年　３月　滋賀医科大学医学系研究科看護学専攻（修士課程）　修了
2003年　４月　滋賀県立大学人間看護学部　助手
2007年　４月　滋賀県立大学人間看護学部　助教
2010年　１月　滋賀医科大学医学部看護学科基礎看護学講座講師
2011年　８月　滋賀医科大学医学部看護学科基礎看護学講座准教授

附属図書館ホー

11 月から附属図書館のホー
リニューアルしたホームペー

- 滋賀医大ホームページやその他学内サイトに合わせてデザインを統一！
- コンテンツを整理し、トップページを見やすくしました。

- マイライブラリのアイコンが新しくなりました。

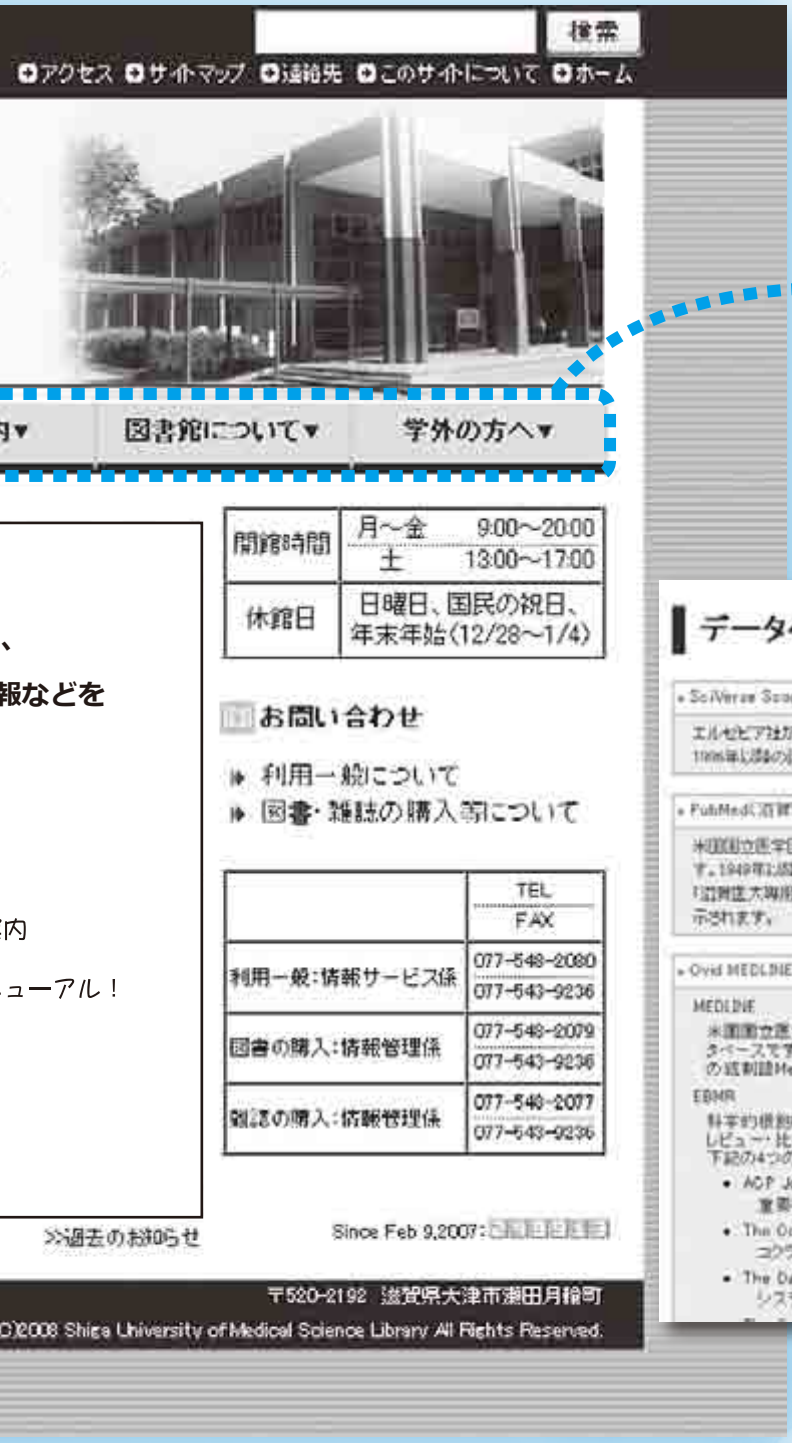
マイライブラリとは、知ってる人は使ってる図書館のオンラインサービスです。
返却日や借りている冊数を忘れても大丈夫！
自分で、借用中資料の確認や貸出期間の延長ができます！
メールと同じ ID・パスワードでログインしてください。

- 利用頻度の高いコンテンツを左メニューに集約しました。

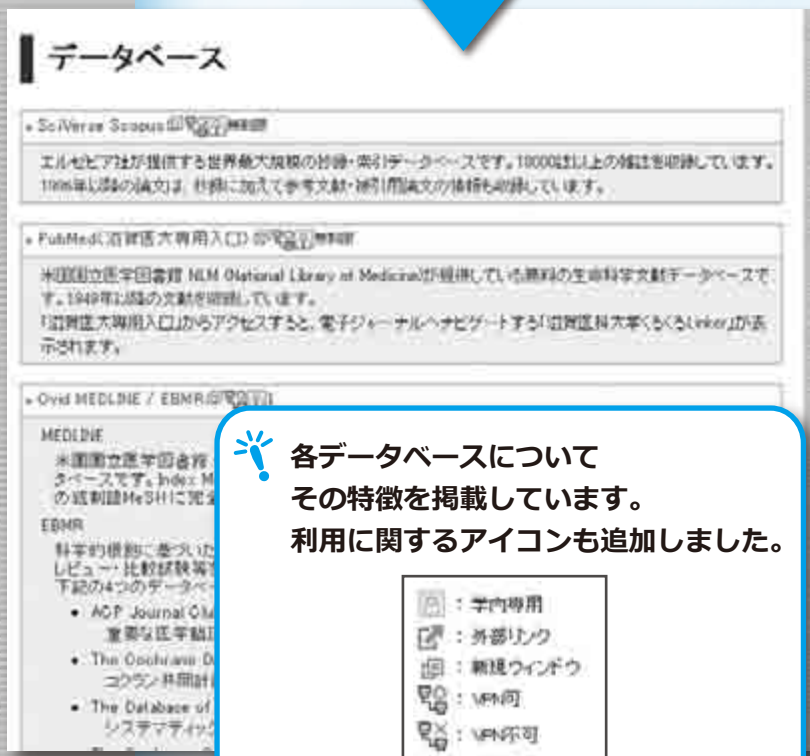
PubMed(滋賀医大専用入口) や医中誌 Web へのアクセスもこちらからどうぞ！

ムページ大解剖！

ムページが新しくなりました。
ージを紹介します。



図書館サービスを目的別に集約しました。カーソルを当てるとドロップダウンで各コンテンツが表示されます。



各データベースについて
その特徴を掲載しています。
利用に関するアイコンも追加しました。

海外自主研修

自主研修を通じて

医学科第４学年　草　野　　淳

自習研修という機会を通じて、カリフォルニア大学のサンディエゴ校 (以後 UCSD) への研修を選びました。選んだ理由は、担当教員が薬理学講座の今村先生であったことと、単純にアメリカの西海岸に行ってみたかったという願望からです。後付けになってしまいますが、今年の自主研修から学内での基礎研修が必修となりこの研修も薬理学の今村先生のところを選び、ここで学んで興味のわいたインスリンに関する基礎実験の応用を UCSD で学べるということで、今まで興味のなかった基礎研究を体験する良い機会と思えたことが、UCSD での研修に対するさらなるモチベーションをあげてくれました。

サンディエゴについた当日から、サンディエゴでの刺激的で何より有意義な生活が始まりました。なぜ有意義であることを強調したかというと、基礎研修でお世話になった今村先生も研修のため UCSD へ同行することになったからです。今村先生は UCSD に留学しておられたため、サンディエゴに詳しくとても心強い存在でした。翌日から実際に UCSD のオレスキー教授の研究室にお邪魔することになったのですが、研究室に入ってまず感じたことが、アジア人が多いということです。研修期間を通じて、UCSD 内のいくつかの研究室にお邪魔させていただきましたが必ずと言っていいほどアジア人を見かけました。普段、日本にいて他国の人を見かけることはもちろんありますが、人種という事をあまり意識したことはありませんでした。しかし、アメリカでいろんな人種の人が入り混じって作業している姿を目の当たりにしたことで世界には異なる外見、文化の人がいて、その人たちが協同して研究をしているのだなと現実のものとして体験しました。

UCSD校内で

UCSD 研究室にて

バーベキュー会場

具体的にはグルコースクランプという生体でのインスリン作用の研究について学びました。実際にマウスの静脈に管を通したり、その後、結果として与えられた測定値の解析を行うことでその原理や導かれた結果について考える機会を与えられました。この研究の先に見据えられるものは糖尿病であり、このような研究から糖尿病に対する新薬が創られたり、新たなアプローチが見いだされていくのだなと肌で感じることができました。また、異なる研究室やバーナム研究所といった私設の創薬研究機関を訪問して、アメリカでの研究の現状、これからの在り方について話を聞く

ことができました。ここでは日本人の方が日本とアメリカでの研究のちがいを対比しながら説明してくださり、アメリカでの研究は結果重視のとにかくシビアだなと感じました。総じて、基礎医学研究とはどんな場所でどのようにして成り立っているのか、UCSD での研修を通じて身をもって体験することができました。

今回の研修を終えて、将来は基礎研究をしたいと強く考えることはありませんでしたが、実際にアメリカで研究に携わっている人たちと接してみて感じたことは、将来の選択肢の一つとして考えてみようという事でした。医師として臨床に場に立つことがすべてと考えていたので、新しい視点を持たせてくれる良い機会となりました。

ここからは、研修のあい間や研修後の旅行について少し紹介しようと思います。研修中は学校が終わると、先生達と食事にいったり、ビーチに行きました。前述のように今村先生とその奥様はサンディエゴに詳しいのでたくさんお勧めスポットを紹介して頂きました。リゾート地と言われるだけあって海は大変きれいでした。また週末は車を借りてロサンゼルスにも行ってみました。アメリカは右車線なのではじめはかなり緊張しました。途中、カリフォルニア広範囲にわたって大停電があったり、9.11 を挟んでいたのでテロに警戒したりといった普段とても味わうことのない一日を過ごしたりと退屈することはありませんでした。日本をたつ前から心配していた食事に関してですが、思っていたほど大味の料理はあまりなく、国境が近かったり、アジア人の多い地区だったことから世界各国の料理があり、むしろ日本より充実していました。UCSD に留学中の日本人の先生方にバーベキューに呼んでいただいたりして食事に関しては恵まれていました。研修後はサンディエゴからラスベガス、グランドキャニオン、ヨセミテ、そしてサンフランシスコと研修メンバーで車移動しました。正直、異国の地ということもあって苦労したことも多かったですが、日本に居ては体験できないことを多く体験することができました。

グランドキャニオン 崖っぷち

細かく綴っていきたいのですが、この文面では語りきれないので割愛させていただきます。

研修全体を通じて、研究についてしかり、異文化についてもしかりで考え方の視点は人や文化によってそれぞれであることを改めて感じさせられました。今後、医師としてだけでなく一人の人として、今回感じたことを糧にしていけたらと思います。

最後に今回の研修でお世話になった人、関わった人、出会った人、学校そして一緒に研修を行ったメンバーに感謝の意を表して自主研修の報告を終わらせていただきます。

サンディエゴ　ビーチ

ルート66　道の真ん中で

ハルビン医科大学での２週間

医学科第４学年　山　口　佳　奈

私は８月30日から９月13日までの15日間、自主研修としてクラスメイト５人で中国黒龍江省のハルビン市にあるハルビン医科大学へ行ってきました。一緒に研修に行った尉林さん、梅田くん、西澤くん、黒木くんを始め、ハルビン医科大学の先生方や学生、また、先方とのやりとりやご指導を含め、様々なお世話をしてくださった相浦先生など、たくさんの方の支えがあったお陰で、毎日本当に充実した時間を過ごすことができました。今回はほんの一部ですが、ハルビンでの生活をご紹介させていただきます。

初日

「海外での研究に携わってみたい！でも英語が苦手だからできれば英語圏じゃないところで。」という思いのもと、海外へ自主研修に行かれた先輩たち何人かのお話を参考にした結果、ハルビン医科大学への研修を希望しました。そんな英語の苦手な私と、男子は３人とも今回の自主研修が初めての海外ということもあって、不安いっぱいの出発でした。いざ関空に着いてみると、中継地の空港が悪天候だったらしく、搭乗予定の飛行機は出発の見通しが立たない状態、空港側からもらった１人２千円のお食事券で、最後の日本食としてお寿司を食べ納め、結局５時間遅れで飛行機が飛びました。ハルビン国際空港に着いたのは０時でしたが、本当にありがたいことに大学の先生が迎えに来てくださっていました。部屋がかなり広くてテンションがあがったものの、シャワーの使い方がわからず冷水のまま浴び、就寝時間は２時過ぎと、何とも波乱万丈な、ますます不安になった初日でした。

お祭りで売るために、日本の「おにぎり」を一緒に100個にぎりました。１個30円！

中国での生活

翌日。先生から日本語を選択科目としている学生を２人紹介していただきました。丹丹とみよこ（中国人ですが、彼女がこう呼んでほしいと言ったので。彼女が最初に覚えた日本人女性の名前だったらしい。）という２回生の女の子２人でした。２人は、食堂の使い方やシャワーのお湯の出し方から大学の案内に至るまで生活するにあたって必要なことを全て教えてくれて、私たちが困ったときは惜しみなく助けてくれる心強い存在でした。彼女たちのお陰で研究も大変スムーズにできたと思っています。

中国での生活で一番不安だったのが食事でしたが、当初思っていた脂っこくて辛いというイメージとは全く違い、おいしくて毎日食べすぎてしまうくらいでした。スーパーや夜店での買い物なども、最初は戸惑っていましたが慣れてしまうと楽しかったです。

火鍋と呼ばれている
ラム肉のしゃぶしゃぶ

病院見学

「折角附属病院があるのだから、研究だけじゃなく病院見学もしてみたい。」という私たちのお願いを研

病院を案内してくださった陳先生と

黒龍江大学に留学にきていた他大学の
日本人学生との交流会

究室の先生が快諾してくださり、研究が終わったあとに、病院見学をさせていただきました。案内してくださった先生は、数年前に１年半日本で心臓外科の勉強をしておられたそうで、専門用語も交えて検査室や ICU などの案内を丁寧にしてくださいました。意思疎通がしっかりとできたので、中国と日本の医療についての考え方の違いや、制度の違い、良いところや改善が必要なところなど、先生とのディスカッションも大変有意義なものとなりました。

たくさんの出会い

何と言っても、たくさんの出会いを経験できたことが、この２週間で得た最も大きなことだったと思います。仲良くなったのは丹丹とみよこだけでなく、日本語クラスのみんなとはピクニックに行ったし、隣の大学で日本語を勉強している男の子たちと野球もしました。日本で数年間暮らしたことがある男の子が食堂で私たちが日本人であることを見抜いて声をかけてくれることもありました。また、中国人だけでなく、日本の大学に留学をした後、中国の大学院に留学している韓国人の女の子や、日本人では、大学で日本語を教えている女性の先生や、１年間ハルビン医科大学の隣にある黒龍江大学に留学しに来ている学生たちとも仲良くなりました。国籍を問わず自分と同年代の学生とたくさんの話ができたことが、すごく新鮮で刺激的で、私も負けてられない、頑張ろうという思いになりました。

自主研修を通して

初日は不安でしかなかった中国でしたが、２日目からは研究、観光、そして遊びとこれ以上ないほど充実した楽しい毎日を過ごすことができました。研究や病院見学から学んだことだけではなく、日本とは違う文化の中で２週間も生活ができたこと、たくさんの友達ができたこと、自分の世界を広げることができたことなど、中国で研修したからこそ得られた幅広い経験は、私の一生の宝物になると思います。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった相浦先生、高歌今先生を始めハルビン医科大学の先生方、ハルビンで出会った全ての友達、一緒に楽しく研修を過ごした４人、ハルビンでお世話になった全ての方々に心から感謝します。本当にありがとうございました。

日本語の授業にも
参加させていただきました

日本語クラスのみんなと太陽島にピクニックへ

滋賀医科大学奨学金奨学生の決定

本学では、毎年、医学科２年～６年、看護学科の２年～４年の各学年から、成績が優秀な者１名を奨学生として採用し、奨学金月額５万円を１年間給付しています。
平成 23 年度の奨学生は以下のとおり決定し、平成 23 年７月 25 日に授与式を行いました。

なお、今年度より当奨学金は、名称を「滋賀医科大学奨学基金」から「滋賀医科大学奨学金」と改め、その財源は滋賀医科大学わかあゆ夢基金から充当されています。

＜平成 23 年度奨学生＞

医学科第２学年	沖　達　也	医学科第６学年	清　水　哲
医学科第３学年	田　村　亮　太	看護学科第２学年	吉　川　芙　雪
医学科第４学年	下　畠　幸　香	看護学科第３学年	渡　邉　奈利子
医学科第５学年	川　口　高　朗	看護学科第４学年	谷　川　温　子

奨学生に採用されたコメント

●医学科第２学年　沖　　達也

今回、滋賀医科大学の奨学生に選んでいただき、非常に光栄に思っております。この結果におごることなく、今後もより一層勉学に励んでいきたいと思います。この度は、ありがとうございました。

●医学科第４学年　下畠　幸香

不器用で要領も悪くて、長時間頑張らないと勉強が頭に入ってこないのに、選ばれてしまっていいのかと戸惑いを感じています。来年のポリクリが意義のあるものになるように、そしてしっかり患者さんの役に立てる医師になるという夢が叶うように、自分の中で努力を続けていきたいと思います。

●医学科第６学年　清水　哲

この度は、奨学基金奨学生に選んでいただき、心より御礼申し上げます。

昨年４月より始まった臨床実習では、先生方の丁寧なご指導、そして多くの患者様のご協力のおかげで、教科書からは決して学ぶことのできない数多くのことを学ばせていただきました。

しかし、今振り返ってみると、自分の実習に取り組む姿勢や、日々の学習への取り組みは決して十分ではなかったように思います。今回奨学生に選んでいただいたことをきっかけとして、自分自身を見つめ直し、良き医師となるべくよりいっそう努力していきたいと思います。

本当にありがとうございました。

●看護学科第４学年　谷川　温子

奨学金奨学生に選んでいただき、大変光栄に思います。そして、大学入学時から自分の学びたいことが学べる環境・機会が与えられましたことを深く感謝しております。ありがとうございます。

このような評価は、家族や友人の支え、ご指導下さった先生方や指導者の皆様のお力添えのおかげだと思っています。みんながいたから一緒に頑張ることができましたし、愛をもって指導して下さるから頑張ろうと思うことができました。本当にありがとうございました。

これから、残りの実習、就職試験、卒業論文、国家試験と頑張り所がたくさんあります。奨学生の名に恥じぬよう、より一層気を引き締めて、将来の夢に向かって努力していきたいと思います。本当にありがとうございました。

●医学科第３学年　田村　亮太

滋賀医科大学奨学生に選ばれたことを大変光栄に思います。このように勉強に励んでこれたのも両親の支えや充実した学習環境のある滋賀医大、周りの仲間たちの存在のおかげだと思います。このような恵まれた環境にあることに感謝の気持ちを忘れず、これからも勉強や部活など頑張っていきたいです。そしてよい医師になれるように今後も日々努力を重ね、自分を磨いていきたいと思います。

●医学科第５学年　川口　高朗

２年後期に学士入学してから、２年半、自分なりにできる限りの努力をしてきました。その努力が一つの結果としてこのような形になったのは、とても嬉しいことだと思います。

臨床実習に入ってからは、座学で学んだことと、臨床に必要なことに大きな隔たりがあることを痛感する毎日です。

「理想の医師とはどんな医師か？」「自分が医学、医療、そして目の前の患者さんに対してできる最大の貢献は何か？」という問いを自分に問いかけつつ、今後もがんばっていきます。

滋賀医大の素晴らしい先生方、丁寧に教えて頂ける研修医や６回生の諸先輩方、学生の勉強につきあって頂ける患者さん方、一緒に学ぶクラスメート達、そして心身ともに支えてくれる家族に感謝の意を示します。ありがとうございます！

●看護学科第２学年　吉川　芙雪

この度、奨学生に選ばれ、大変光栄に思います。

これも教えてくださった先生方や共に勉強し助け合った友人たち、そして家族のおかげであり、とても感謝しています。

これからもこの名に恥じないように、一生懸命頑張りたいと思います。

●看護学科第３学年　渡邉　奈利子

この度、奨学基金奨学生として選ばれたことを大変光栄に思います。同時に、奨学生の名に恥じぬよう、より一層勉学に励まなければと、身の引き締まる思いです。

９月からは臨地実習が始まりますが、今まで学習してきた基礎や専門、看護過程の展開などのより深い学びの習得ができるように、一つ一つの経験を大切にしていきたいと思います。

ヨット部による追悼慰霊式

本学ヨット部は、去る平成４年９月 11 日（金）午後４時 50 分に琵琶湖で不幸にも遭難した故嶋岡秀典君の慰霊式を、９月４日（日）の 11 時から行いました。

今回は台風 12 号の影響を考慮して、会場をクリエイティブモチベーションセンターに移し、実施しました。嶋岡さんのご家族、服部副学長、ヨット部顧問の藤山内科学講座教授、ヨット部 OB 他関係者約 40 名の列席があり、大学関係者の挨拶の後、ヨット部主将の医学科第３学年 成田　雄亮君から部活の安全対策に対する誓いの挨拶がありました。

成田主将の挨拶

2011年　嶋岡さん追悼慰霊式

医学科第３学年　ヨット部主将　**成　田　雄　亮**

今年で悲しい事故から19年の年月が経ちました。僕は嶋岡秀典さんの慰霊式に初めて参列してから今回で３回目となりました。

嶋岡さんの慰霊式をとりおこないますことは、代が変わり最初にやってくる大切な行事であります。

今年は主将としてこの日を迎え、これまでとは違う、新たな代の始まりとして、決して気をぬくことのできない緊張感を改めて認識し、一年間ヨット部の主将としてやっていくのだという決意がより強く固まったように思います。

練習を終えて、無事に何事もなく浜に帰着したとき、ふと安心いたします。この何事もないことこそ何よりも大切なことで、それに対して心から感謝することを決して忘れてはならないことなのだと思います。

そのことをこの慰霊式を通して、そして嶋岡秀典さんの存在を通して、わからせていただいたのだと思います。

自分のものではない何にも替えがたい命に対して、責任があるということを自覚し、２度と悲劇をおこさないように、自分自身日々安全に対する知識と技術を身につけることに精一杯励み、また後輩達に、先輩方が築き上げてきた安全対策の知識の集積を途切れさせることなく教え伝え、そして何よりも嶋岡さんと嶋岡さんのご家族のご意志を決して絶やすことのないよう、主将の責務を果たしていく所存であります。

最後になりましたが、嶋岡秀典さんの安らかなご冥福を心よりお祈り申し上げさせていただきます。

服部副学長の挨拶

列席者による献花

国立病院機構　滋賀病院だより

地域医療の充実に向けて

滋賀医科大学総合外科学講座 教授
（国立病院機構滋賀病院　副院長）
来　見　良　誠
（医学科1期生・昭和56年卒）

国立病院機構滋賀病院は、名神高速道路八日市インターチェンジに近接する総合病院で、滋賀県・国立病院機構・東近江市・滋賀医科大学により医療再生計画が着実に実施されている医療機関です。現在建設中の新病棟は平成25年4月オープン予定で、23診療科・320床の総合病院として整備されつつあります。平成23年4月に滋賀医科大学より総合外科・総合内科から多数の医師が派遣され、内科・外科をはじめとして、消化器科・救急科・整形外科・脳神経外科・耳鼻科・眼科・産科・婦人科・呼吸器科・呼吸器外科・麻酔科・歯科口腔外科・小児科・神経内科などの診療が一段と充実し、東近江医療圏の中核医療施設として生まれ変わっています。

滋賀医科大学の使命の一つとして、地域医療の充実がありますが、当病院は滋賀医大の分院としての機能を達成できるように、医療の実践と優れた総合臨床医の育成を目指しています。大学より派遣されているスタッフは、教授2名・准教授3名・講師1名・助教4名と、各医局より派遣されている医療スタッフをあわせ、計27名の常勤医師で運営されていますが、今後更に増強される予定になっています。

滋賀医大附属病院が高度に細分化された専門領域を診療の対象としているのに対し、東近江医療圏の中核施設となる当院では、医療の原点である初期診療を中心に、診療科の総合化を行い、多方面に対応できる医師の育成を目指しています。現在のスタッフはそれぞれの領域においても、専門医として診療を行っているため、当院での実習や研修では、総合研修から専門研修まで可能です。

地域医療の充実には、何でも診れる総合医による医療の実践が必要です。医師と医師が専門領域を超えてつながり、求められる医療資源を互いに提供しあえるような環境を作りたいと考えています。「つなぐ」という言葉をキーワードにして、診療科と診療科、患者さんと病院、診療所と病院など、他職種間を円滑につなぐための仕組みを構築したいと思っています。

滋賀病院鳥瞰図

総合外科学講座は総合内科学講座と連携しながら、総合臨床医の育成を目指すと同時に、研究面では、地域医療活性化のための方法論の構築と地域間の情報転送、特に画像情報や触覚の転送を研究テーマとして取り組んでいます。地域医療の中にハイテクを導入することにより、医療再生の道すじを見出したいと思っています。

一期生として入学してから35年にして、ようやく滋賀医大の卒業生による滋賀医科大学附属第二研修病院としての機能を持つ総合病院が完成し、滋賀医大の分院機能を担っていけることに、充実感を得ています。更なる人的医療資源を投入し、地域の活性化と地域医療の充実を目指していきたいと思っています。卒業生の中で、総合臨床医を目指している人や地域医療の再生に尽力できる仲間が現れることを期待しています。

快適な周術期、快適な病院

国立病院機構滋賀病院麻酔科医長
藤　野　能　久
（医学科8期生・昭和63年卒）

「おはようございまーす！」国立病院機構滋賀病院の朝は早い。当院では多くの先生が早朝から活動を始める。大きな声で挨拶をしあい、気持ちよい一日が始まる。私も毎朝前日手術の全患者さんの術後診察と当日手術の全患者さんの術直前チェックのために関係する全病棟の回診をおこなう。このあと時間に余裕があるときは毎朝行われている内科のカンファレンスに出席する。この内科のカンファレンスは他科の先生も自由に参加可能であり、専門科を超えた熱いディスカッションがおこなわれる。

中小規模の病院の医局は各科共通フロアが多いと思われるが、当院もそうで他科の先生と話しやすいばかりでなく、医局内で話していることがすぐに聞こえてきてその話に途中から気軽に加わってしまったりする。常に笑いが絶えずとても楽しい時間となる。そして医局内にはこの地域の中核病院を再生して立派に立ち上げてゆくことに参加できるという喜びと熱い静かな気概の盛り上がりが感じられる。

麻酔科は患者に対してだけでなく、外科系各科へのサービスを行う中央診療科の1つであるので、良好なコミュニケーション状態は仕事上の情報交換を円滑に行うことに役立ち重要である。特に当院勤務の医師はほぼすべて滋賀医大出身者もしくは入局者なので新しく次々と赴任されてこられる先生方もほぼ全員互いに知っており、また、あまり知っていなくても同郷の意識ですぐに打ち解けて気軽に話ができる間柄となる事ができ、とても働きやすい。そうは言っても人間の集団であるから仕事上において意見が異なり主張がぶつかることもなくはない。しかし、そのような場合でも共通の先輩の別の科の先生が介入してうまく調整する。それは同郷の誼からかもしれない。このように当院は滋賀医大第二附属病院としての性格が全科にわたり上手く機能している。従って当院に勤務すれば楽しく快適に働けるだけでなく、地域医療の再生と病院の創成に参加でき、臨床上も多くのことを学ぶことができ、自分を育ててくれた滋賀医大にも貢献できるという喜びや満足感・充実感が何倍にも得られる滋賀医大出身者にとってはまれな病院と言える。

術前診察と麻酔の説明に十分な時間をとり、麻酔科においても良好な患者―医師関係を構築できるように努めている

ところで、麻酔科はCure（治療）を直接行うことは少なく、Care（ケア）を行う科であるとされている。すなわち、麻酔科は周術期の患者の生命を守り、安全を確保する重要な役割を果たすことはもちろんのこと、術後の疼痛コントロールを中心とした周術期の快適性を上げることもその任務の一つであると私は考えている。そのために当科では重点的にいくつかの取り組みをしている。

第一に術前診察と説明重視。これを丁寧におこなうことによってオーダーメイドの麻酔計画と安全確保はもちろんのこと患者さんから信頼を得、周術期を安心して不満なく過ごしていただくことに繋がると考えている。

第二に手術終了後速やかで質の高い覚醒。質の高い覚醒とは痛みなく、気分不良なく、クリアな意識状態という術前と同状態に速やかに戻すことと考えている。時に患者さんは手術終了して覚醒後「今から手術ですか？」と質問される。

第三に当院では今年始めから術前経口補水療法を開始した。当方法は患者さんの快適性を上げるだけでなく術後早期回復促進に影響を与えるとされており、さらに病棟看護師の労働量の減少、医療安全向上にも寄与すると考えられている。さらに当院では保険適用の経皮的局所麻酔薬含有テープ剤を採用し、手術室での点滴時の疼痛緩和をはかっている。

周術期において麻酔科としては「治療」にも関与しながら「安全」を保ったまま精神的・身体的負担のない「快適」な周術期を送っていただくことを目標にしている。最終目標は「全く何のストレスも痛みもない周術期」である。究極は「手術したことに気がつかない」もしくは「旅行気分で楽しく手術を受ける」などを想定している。

先日ある術後患者さんから「入院まではとても不安だったけど、不安なく痛みなく快適に手術を終え回復できました。今度手術するときがあったら、また先生に麻酔していただきたいです。」麻酔科でもこのような現象があるのかと私自身驚きであった。このように患者さんの満足感を確認できるときに私も充実感を得られ、やりがいを感じる。

これからも安全は必ず担保しながら「Care」をキーワードに各科に配慮しながら究極の周術期管理を目指して工夫を重ねてゆくつもりです。

麻酔科医はまだ全国的に不足しています。地域の中核病院である当院には特に麻酔科医が不足しています。当院には麻酔科の常勤の仲間が必要です。研修医の皆さんはもちろんのこと、地域医療再生を目指す当院の要である麻酔・周術期全身管理で素晴らしい病院を創り上げてゆく一員となることをご希望の方は、どうか私にご連絡ください。笑顔の中で心地よく充実した有意義な毎日を送れることをお約束します。

ある整形外科手術の麻酔中の様子

術後も必ず麻酔科医による術後診察を丁寧に行い、術後鎮痛処置の調整などを行う

平成 23 年度第 1 回学位授与式

課程博士（4 名）

[redacted]

論文博士（6 名）

[redacted]

修士（1 名）

[redacted]

平成23年度医学科第2年次後期学士編入学入学宣誓式 並びに 平成23年度秋季大学院医学系研究科博士課程・修士課程入学宣誓式

去る10月3日（月）10時から、本学管理棟大会議室において挙行されました。

告　　辞

学長　馬　場　忠　雄

本日、平成23年度滋賀医科大学医学科第二年次後期学士編入学および秋季大学院医学研究科入学宣誓式を挙行できますことは、本学教職員と在学生にとって大きな喜びであります。

学士編入学の17名の皆様滋賀医科大学入学おめでとうございます。本日のよき日を迎えられたのは、今までの経験を医学の道に生かし、医学研究や医療において大いに活躍したいという「高い志」をもって、不断の努力を重ねてこられた結果であります。そして、その「高い志」を理解し、経済的にも精神的にもサポートされた御家族はじめ関係各位の励ましと協力の賜物と思います。改めて皆様方に感謝し、それに報いるべく、本学において「高い志」を達成するため一層自分自身を磨いてください。

本学は、1974年10月１日に創立され、今年で38年目となります。現在まで医学科卒業生は3,013名を数え、その内1,037名、約34％が本県の医療に従事する一方、卒業生の33名が国公私立大学の教授として教育研究に活躍し、また専門領域の学会においても大いに活躍し、地域やわが国の医療に貢献しています。学士編入学は、平成12年に定員５名で始まり、以降10名、15名、さらに17名と増加してきました。その目的は、学士編入学者が他分野で学んだ知識や技術、あるいは社会人としての経験を医学・医療の場で生かし、医学・医療の発展に寄与することであります。今回の入学者は、大学卒以上の学歴の持ち主で、その道においても活躍が期待された方ばかりで、この優秀な人たちが「人」に魅せられ、本学を選んでいただいたことに敬意を表します。「人」を対象とする学問はいろいろありますが、「人」の生命と営みに対するアプローチは、形態から機能まで、あるいは基礎から臨床に至るまで広い範囲にわたり、どこかの領域で今までの知識や技を生かし、新しい息吹を吹き込む機会があると考えます。

また、医学を学び、研究や臨床あるいは地域医療に貢献しようとする熱い情熱を持って入学された皆様に対して、本学の教職員は勿論のこと、地域の方々も支援を惜しまないと思います。

本学の医学教育の基本は、「地域基盤型教育（Society-based Education）」であり、地域のボランティアの方々に、生活面から教育や診療に至るまで幅広く関与し、支援いただいております。医学教育では知識（Science）と技能（Arts）の基本を教授し、研究と診療に役立てると共に、生命に対する倫理感（Ethics）を養うことを目指しています。一般社会の人々の目線で医学・医療を感じとることを身につけて下さい。

近代医学の父と呼ばれるウィリアム・オスラー教授は、カナダのオンタリオ州で生まれ、当初トロント大学の聖職者を目指していましたが、医学へ転向し、トロント大学医学部からマギル大学を卒業後、イギリス、ドイツに留学し、マギル大学、ジョンズホプキンス大学の教授を務め、医学の発展と医学教育の向上に大きく貢献しました。オスラー教授は、教科書がなく医学を学ぶ者は、海図のない海を航海するのと同じであり、患者がいなくて医学を学ぶ者は、海さえも行けないのと同じだと言っています。そして、オスラー教授は、「Listen to your patient, he is telling you the diagnosis」と云い、患者の病歴の聴取は、最も重要であると強調しています。医学教育においては、現在Problem based learning（ＰＢＬ）が取り入れられていますが、患者と共にWith、患者からFrom、患者についてAbout、そして患者と共に考えるThinking Withの教育が、患者中心の医療（Patient centered medicine）にも結びついて、医学を学ぶ上で重要な視点となっています。

患者の訴えをよく聞き、身体所見の特徴を見い出し、知識を整理し、知識がなければ文献で調べて、考えて課題を解決する学習態度が求められます。

ところで今、ご承知のように地域医療の崩壊に対応して、滋賀県は地域枠の他にも第３学年から産科、小児科、麻酔科を希望する学生に奨学金を与え、支援を行っております。また、国保連合会においても第４学年から奨学金を用意しております。これらを活用していただければ幸いです。地域医療再生計画のもとに、本学に「地域周産期医療学講座」や「地域精神医療学講座」の寄付講座が設置され、今年4月には東近江医療センターに「総合内科学講座」と「総合外科学講座」を開講し、教育、研究、診療活動がスタートしているところであり、学生や研修医の総合医としての教育の場とする予定であります。

診療に携わるにしても、研究の道に進んでも医学・医療の世界は大変厳しいものがあります。診療においては、患者が主体で７時間45分の労働時間で済むものではなく、日夜勤務時間にとらわれない状況です。医学部を目指された原点は、高収入、高い地位、安定した職業ということではなく、病に悩む人に対して少しでも手をさしのべ、役に立ちたいという「高い志」であると思います。苦しい、厳しい状況におかれても課題を真正面から受け止め、100％努力することで、自分自身が心から満足できる達成感が得られるものと確信します。

初心を忘れることなく、「高い志」を持ち続け、信頼される医療人として本学で成長され、地域にあるいは世界にその成果を還元してくれることを祈念しています。

平成23年度秋季大学院医学研究科博士課程入学者６名、修士課程入学者３名の皆様、ご入学誠におめでとうございます。秋入学については、平成20年度に文科省より補助金を得て、大学の国際化を目指し、調査を行っておりました。外国からの入学生を迎えるのには、秋入学が適しているので、最近、東京大学は学部生の入学について、国際化に対応して秋入学を積極的に取り入れ、海外から優秀な学生を迎える方向で検討しています。小中高校の教育システムにも影響することであり、また、他大学など今後の動きが注目されています。本学では、昨年度から秋入学を大学院に取り入れています。また、社会人入学制度や、医学研究コースの他に高度専門医コースも昨年度から導入しております。

大学院教育においては、実質化が叫ばれ、講義、演習など論文作成に必要な知識と操作技術の習得が重視されています。しかし、大学院の使命は、独創的な研究の芽をつかみ、それを伸ばすことであります。研究は、絶えずtry and errorで、高い壁に立ち向かってそれを乗り越えてはじめて大きな成果が得られます。高度専門医コースは、基礎的な実験だけでなく、臨床研究の積み重ねを数編の論文にまとめ、新しい臨床知見を見い出すと共に、専門医の取得を目指した臨床実績を評価の対象としております。いずれのコースについても「温故知新」を忘れずに、自分の研究分野の文献を詳しく調べ、得られた実験データーについて、指導者や同僚との議論を経て、さらに自分の工夫を加え、新しい知見をつけ加え、少しでも医療の道に生かせる努力をして下さい。

滋賀県は日本の中央に位置し、人口増加県であり、琵琶湖を囲んで自然環境に恵まれ、東京、京都、奈良に次いで旧所名跡も多く存在しています。勉強や研究の合間に訪れて、楽しい充実した学生生活をエンジョイして下さい。

以上、告辞といたします。

平成23年10月３日

後期学士編入学

後期学士編入学（17 名）

1	青　柳　　潤	6	奥　村　隼　人	11	田　口　俊　亮	16	増　本　住　泰
2	安　達　美　聡	7	川　津　邦　裕	12	武　村　秀　孝	17	松　井　克　憲
3	池　田　朝　彦	8	高　祖　麻　美	13	西　　奈津実		
4	大　橋　瑞　紀	9	坂　本　杏　理	14	原　澤　俊　也		
5	小　川　和　哉	10	佐　藤　一　輝	15	前　田　裕　之		

平成 23 年度秋季入学者

博士課程入学（6 名）

1	青　田　正　子	4	楊　　宏　寛
2	岩　堀　敏　之	5	HOANG DINH TUY
3	Nguyen Van Tho	6	渕　　宇

修士課程入学（3 名）

1	久　世　晴　香
2	小　寺　利　美
3	和　田　はるか

第37回　解剖体慰霊式

去る10月27日（木）午前10時から本学体育館において、ご遺族、ご来賓、しゃくなげ会会員及び教職員・学生約600名の参列の中、厳かに第37回滋賀医科大学解剖体慰霊式を執り行いました。

このたびは、系統解剖36霊、病理解剖35霊、法医解剖82霊、計153霊を新たにお祀りし御霊のご冥福をお祈りしました。

慰霊式は、出席者全員で御霊に黙祷を捧げ、諸霊芳名拝誦、馬場学長及び学生代表による慰霊の辞、高橋しゃくなげ会理事長の献辞、出席者全員による献花が行われました。

最後に、ご遺族代表のご挨拶及び、本学教授代表として解剖学講座の工藤教授から挨拶があり、厳かな内に閉式となりました。

会場の様子

馬場学長による慰霊の辞

出席者全員による献花が行われました

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
勢多だより
DEC 20, 2011

編 集 後 記

四季折々の学内行事を中心にご紹介している「勢多だより」ですが、この号から数回にわたり「国立病院機構 滋賀病院だより」を掲載することとなりました。来見良誠教授の記事にあるように、滋賀医科大学の在学生や卒業生が総合臨床を学ぶ場として、またそれを通じた滋賀県の地域医療への貢献を目指して、大学から派遣された多くの先生方が診療と教育に従事しておられます。滋賀病院各科でご活躍の先生方の日常が次々と紹介されると思いますので、ぜひご一読ください。

編集委員長　宮松　直美

（勢多だよりの由来）

勢多は勢田、世多、瀬田とも書かれるが、古代、中世の文献では、勢多が多用されている。それに勢多は「勢（いきおい）が多い」という佳字名称である。従って、いきおいが多かれと願う本学関係者の想いにぴったりということで、瀬田とせずに、あえて勢多とした。

（題字は、故 脇坂行一初代学長による）

勢多だより　№ 91
発行年月日：平成23年12月20日
編集：「勢多だより」編集担当者会議
発行：滋賀医科大学広報委員会

滋賀医科大学
SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

学章の説明

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたもの。
「中心に向かって、外からさざ波の波動－これは人々の医への期待である。外に向かって中心から一隅を照らす光の波動－これは人々の期待に返す答えである。」